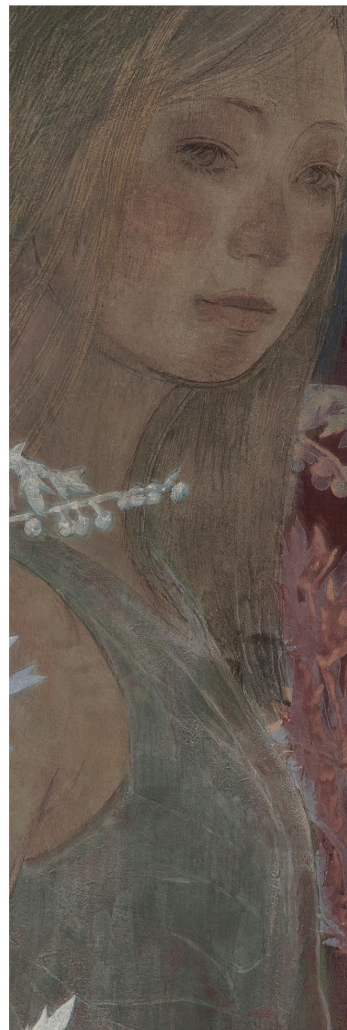
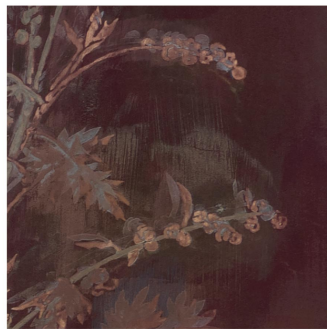


池谷 貴子
IKEYA Takako



永遠の直前
紙本着彩



永遠の直前

表現した世界観の基盤には、幽顕一如の考え方がある。人が日常生活を送る顕の世界は、神や靈魂の在す幽の世界と一体に在るという世界観である。

現代の私たちが生活するうえで、幽世の世界、靈魂の世界について意識が向くことは多くはないだろう。それでも、日が落ちかけた時に通る田舎道や昼でも暗い林、あるいは都会の中にあってもそこだけ気温が低く感じられる神社など、日常生活の合間に靈的なものの存在を感じる場面はまだ存在する。靈魂の世界を、生きている人間の世界から切り離されたものとはせず、寧ろ生きている間に見るものは全体の一側面に過ぎないとする幽顕一如の世界は、現代社会の中からも感じることができる。

これを踏まえて、私は自分が置かれているこの世界を、生きて生活する場だけでは完結せず死後も永遠に続く大きな流れとして捉えている。修士作品《永遠の直前》では、見たり聞いたりして顕かにすることが出来ない幽世の存在を、現世の淵から感じさせるような表現を探求した。

私たちが靈魂の世界を感じるきっかけとなる場面は日常の合間にさまざまに存在する。今回の作品では、薄暗がりにある白っぽい藪を靈魂の世界へと誘うモチーフとして描いた。「薄暗がり」、「藪」、「白」といった要素の一つ一つがこの世ならざるものの象徴である。

また、私がとりわけ植物から靈魂の世界を感じる所以は、その繁殖力と生命力の強さにある。切っても再生し、次々に種子を作って殖えていくサイクルは、個体の生命の輪郭を曖昧にし、集合体として永遠の命を感じさせる。人の一生もまた、永遠のサイクルに呑み込まれる直前のほんの一瞬の出来事なのではないかと思われる。

現世の中に生き、現実に見えるものを描きながら、意識は現実の時空を超えて見えないものへと向かう。見えないものを見るための絵を目指した。